

浄土

monthly
JÔDO

2013
May
5



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかモニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「びっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。

淀みの川を流れつ…

合掌

浄土

2013/5月号 目次

法然上人と聖女テレゼ、 そしてマザー・テレサ	インタビュー 石丸晶子	2
会いたい人 小日向文世さん 下	関 容子	10
響流十方	小村正孝	20
連載小説 渡辺海旭	前田和男	24
江戸を歩く	森 清鑑	34
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
表紙・表紙裏＝2013「浄土」表紙の人 佐野芳朗		
背表紙裏 ＝泰雲の美味探訪		



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

石丸晶子

インタビュー

聞き手 ● 長谷川岱潤

法然上人と

聖女テレゼ、

そして

マザー・テレサ

長谷川 先生にはこの連載以外にも、原稿をいろいろ書いていただきました。

その中、二〇〇五年の本誌十月号に、「法然上人、そして、聖女・テレーズのこと。宗教間の対話を願って」という題で、原稿を寄せていただいたことがあります。この原稿は大変すばらしいものでした。そして、この中に、先生が法然上人に寄せる心が、すごくあらわれているような気がしますので、今回少し詳しくお話してください。

石丸 はい。私は「聖女・テレーズ」が大好きです。私は子供のころにカトリックの洗礼を受けました。私たちにとって「聖女・テレーズ」は、超有名な聖女です。

彼女は、十九世紀の末、一八七三年に生まれて、一八九七年二十四歳で肺結核で死去した聖女です。

非常に美しい方で、私が子供のときは、ただその姿に憧れていただけなんです。憧れにまかせて、テレーズに関する本をたくさん読んでいました。そんな中で高校時代に、法然上人に出会いました。

そして、法然上人と「聖女・テレーズ」の教えは、すごく似通っている、共通しているということを感じたのです。

「聖女・テレーズ」が生まれる前、カトリックの教会がたどってきた歴史というのは仏教がたどってきた歴史とよく似ています。

中世から近世にかけて、ものすごい厳格主義で、とにかく何かというと、「すぐに地獄に落ちる」と言われました。シスターとか神父様とかでないと、容易に天国に行けない。

一般市民は、「煉獄」という、地獄と天国の中間のところに、長い間放り込まれてしまう。日曜日のミサをちょっとサボっただけで、地獄に落ちると言われていたのです。

とても厳格主義だったので、断食や祈祷、その他もろもろの修行に明け暮れて精進しないと天国に入れない。言ってみれば、まさに自力です。人と交流したり、話をしたりすると罪を犯すからというわけで、沈黙が奨励され、孤独に生きることが大切だとされました。

近世のフランスでは、神様というのは恐ろしい方で、慈悲の神様ではなく、人を裁く裁判官のような存在であるということが強調される時代だったと思います。

そういうところに、「聖女・テレーズ」が、十五歳で、「カルメル会」という修道院に入っていました。

長谷川　そこはどんな修道院だったのですか。

石丸　有名な「トラピスト」よりもっと厳しい修道院です。そこに一度入ったら、死ぬまで、「お棺に入れられて出る以外は出られない」という、生涯、その間の中で生活することが義務付けられ、それを神様の前で誓った修道院なのです。

つまり、断食と沈黙、祈りのほか、鞭打ったり、下着に釘を縫い付けて、血まみれになったりというような苦行が奨励された時代に、この「聖女・テレーズ」は生きたのです。お食事を美味しいと思って食べるだけで、それは肉欲の大罪だと言われた時代でした。

テレーズは十五歳でそこに入りましたから、今で言えば、中学三年生までの学力しかない人だったのですが、そういう人が本当に神様の光に照らされて、法然上人がおっしゃったこととまさにぴったりすることを自叙伝の中に書いたのです。

神様は裁判官ではなく、愛の神であり、それに、ただ、お父さんに慕うようにおすがりすればいい。自分の自力では、真砂の一粒が天上を高く飛ぶ鳥になろうと思うに等しく、到底かなわないことであって、神様の腕に抱かれていけば、自分の足を運ばなくても、ち

ようどエレベーターに乗っているようなもので、ひとりで天国に運んでいただける。だから、神様の愛を信頼して身を委ねればいいということです。

このことを、二十四歳で亡くなる少し前に、彼女は修道院の院長さまから命じられて、自分の思い出の記に書きました。

それが、死後一年後に出版されまして、世界的なブームを呼んだのです。まさにそれが法然上人と全くびつたりしていたのです。

それで、私は、こんなことを言うと、カトリックの側からは批判されるかもしれませんが、「聖女・テレーズ」が悟ったその悟りを、法然上人は八百年も前におっしゃっていると言いたいのです。テレーズは自分が発見した道を「小さな道」とよび、この道を通って徳の高見に至りました。テレーズは今、20世紀最大の聖女と言われています。

長谷川 法然上人は八百年前、日本の仏教界を一変させる自力から他力への教えを説きました。それはいくら強調しても言い表せぬほど大きな転換点があったということだと思えます。それと同じことをカトリックにおいては「聖女・テレーズ」が言ったのですね。

石丸 日本のカトリック教会も遅れていましたから、私自身が洗礼を受けたのは、昭和二十二年ですが、ほんとに厳しかったです。

日曜日にミサをサボると、もう大罪で、「地獄に落ちて許されない」とか、「断食のときに、こういうことをしてはいけない」とか、とにかく、たくさん戒律があつて、それを犯したら地獄に落ちるということを、やかましく言われていたのです。

だけど、そうじゃなくて、神様は愛であり、怖いのではないということをテレーズは示してくださいました。

テレーズの言うことは、小さな子供が何かいたずらをしたときに、「ママ、パパ、ごめんなさい」と言う。そして、「もうしませんか」と両親が訊ねると、「もうしまちえん」と言うけれども、実は両親は再び子供が同じような過ちをすることはわかっています。それでも「いいよ、いいよ」と抱き上げて、頭をなでてあげる。

それと同じことで、神様は、私たちがどんなに弱くて、罪深くて、「何をしちやいけない」と言われても、それをしてしまおうし、どんな人にも、人のものをうらやんだり、ねたんだり、嫉妬したり、いろいろな心があります。真つ白で、聖人の心を持った人は、世界中で誰一人としていません。

だけど、そういう罪深い自分自身を丸ごと神様に投げ出して、それこそ、法然上人の教えで言うと、「南無阿弥陀仏、お助けください」と称えるのが大事なんだということになります。テレーズの言葉を使うと、「アッパ、パパ」と言うんです。

「アッパ」というのは、「ナムババ」ということなんです。「アッパ」というのは、イエス・キリストがいらしたころのイスラエルの言葉で、「お父ちゃん」という意味です。「アッパ・パパ」とテレーズは言うのです。ですから、「パパ、お父ちゃん」という意味なんです。

この当時、カトリックでは、神様のことを「パパ」とか「お父ちゃん」なんて呼ぶことはとんでもないことで、「天主さま」、「神様」で、こっちはひれ伏していなければならなかったような時代でした。

そういう時代に、テレーズは「私は自分の足では到底、自力では行けないことはよくわかっていたので、神の腕に抱かれて、つまりエレベーターに乗って、神の愛のエレベータ

1にすがって、神様の腕に抱かれて、天国に行くほかない罪人だ」と言っているのです。ですから、そこが法然上人と似ているのです。

このテレーズの思い出の記が出版されたことを転換点にして、カトリックの教会は徐々に、それこそ自力から他力宗教へと変わっていったと思います。

長谷川 そうだったのですか。今のカトリックの教会もそうでしょうし、それから浄土宗も多分そういうところもあるように、宗教というのは、やっぱり、厳しさというものが、いいものだという考え方苦行主義というのでしょうか、それがすばらしいという考え方がどこかにあります。

私自身もかなり昔ですが、丸山照雄先生に私の尊敬する僧侶の先生を紹介するときに、「剃髪で、禁欲で、毎日念仏行をされている、それはそれはまじめなすごい先生なんです」と紹介しましたら、丸山先生から「浄土宗はそういう宗派ですか」と言われてしまい、ハッとして目が覚めたような気がしました。

私たち自身が、宗祖がそうとうの覚悟と勇気で主張された脱苦行主義を、否定してしまうようなことを言っているのかもしれないね。

法然上人の時代、三論を極め、高野山で修行している明遍僧都という学僧が、法然上人の『選択集』を読んで、「この人はいささか偏執なところがある」と思って寝たところ、夢を見たということです。

四天王寺の西門で、大勢の病者に一人の聖がひとさじずつ粥を与えている。

あの聖は誰かと聞くと、法然上人であると教えられたという。ここで目が覚めた。なるほど、今の時代は混迷を極め、人々は迷っている、正に病者と言える。果物などどんなに

すばらしい食事であっても、病者にはそれを消化する力はない。やさしい粥のようなものしか食することができないように、誰でもできるお念仏しか、今の時代には役に立たないのだと悟って、法然上人のお弟子になったという話があります。

私たちはやはり原点、法然上人のお心を忘れないようにしなければいけませんね。

石丸 ええ、そうですね。

長谷川 私たちは先生のような立場から、法然上人の原点のような、優しさというものを指摘していただくと、本当に目が覚めるような思いがあります。

石丸 法然上人が自堕落の考えであったかという点、そうじゃないです。

そうではなくて、法然上人は自分を律することに非常に厳しい方だったと思います。

長谷川 ええ、そうですね。でも、その教えはそうではなかったのです。

石丸 そうです。法然上人自身が、「十悪の法然坊」がお念仏によって、極楽往生することを願っているんだ、ということをし、しばしば口にされたということです。

ご自分自身は、「私は、意思が強くて、自分自身に対して、自分を律することが厳しくて」なんてことは、一言もおっしゃらないです。

長谷川 ええ、ないです。むしろその逆です。

石丸 「十悪の法然坊」ということをよくおっしゃるんです。

だから、人間というのは、やはり、普遍に至ると、「十悪の誰々」と、自分がいかに罪深い者かということを、みんな感じていくのではないのでしょうか。

長谷川 大事なところですね。

石丸 そうだと思います。私の親類の者で、やっぱりカトリックなんですが、カトリック

では、罪だと思ふものを犯したら、神父様に告白して、許してもらおうという、「告解の儀式」というものがあります。

そうすると、亡くなったそのおじが、常日頃、「僕は悪いことなんかしたことはないから、告解のしようがない。告解する罪人ではない」と言っていました。

だけど、人間というのは、いかに自分は至らないかということを、自分を掘り下げれば掘り下げるほど、そこに至り着くのではないでしょうか。

長谷川 そうです。浄土宗の基本指針のひとつ、「愚者の自覚」です。

(つづく)



連載

会いたい人
関 容子

小日向文世

さん

① 下



撮影／タカオカ邦彦

この二月二十七日、読売演劇大賞の受賞パ
ーティーが東京・帝国ホテルで開催され、小
日向さんは昨年度の最優秀男優賞受賞者なの
でプレゼンターとして出席。記念のモニュメ
ントを今年の受賞者中村勘九郎に手渡した。
有望な新人に贈られる杉村春子賞は中村七
之助が受賞し、昨年十二月に早逝した父勘三
郎が生きていたら兄弟の受賞をどんなに喜ん
だことか、というのが会場の人たちの一様に
持つ思いだった。

この日の昼は十二代目市川團十郎の葬儀が
青山斎場で行われたので、そこからこのパー
ティーに移行してきた人たちが多くあったが、
その中に新派の波乃久里さんがいた。

明日、小日向さんにインタビューするの、
と話す、目を輝かせてこう言った。

「えっ、あの人、今一番の役者じゃないです
か。前に、新橋演舞場の『浅草パラダイス』
で弟（勘三郎）と共演したことがあったでし
よ。吉田日出子さんと私も一緒だったとき。

あのとき、弟が言っていたの。小日向^{こひなた}さんはす
ごい、つて。でもいくら早く生まれすぎて
るね、演技に説明がないからちよつとわかり
にくいところがあるけど、十年、二十年して
ごらん。名優として評価されるから、つて。
それで去年の二月、いきなり『最優秀』だっ
たでしょ。『優秀』を何年も経験してからじ
やなくて、いきなり。ほら、みなよ、つて弟
が、得意そうに（笑）」

翌日、小日向さんに会ってすぐこの話をし
た。

「えーっ!! そんなことをあのときから勘三
郎さんが言ってくれてたんですか。嬉しいな
あ、というか、有難いことですよね。あの名
優勘三郎がそんなことを言ってくれてたなん
て……。

僕は勘三郎さんの芝居を観て、同じ時代に
生きられて本当によかった、と思ってます。
後世の人たちが、彼がいかに素晴らしかった
かと本で読んだり、映像を見たりしても、僕

小学生のときこぶとりじいさんの悪いじいさん役を演じた小日向さん(左ほほにこぶをつけている)。



はナマで観たんだし、共演もできたんですからね。

共演した半年後、改めてコクーン歌舞伎の『三五大切』を観たら、勘三郎さんは浪人者の源五兵衛。自分が殺した女の首をふところに入れて、傘さして客席を歩くとパラバラと雨が唐傘に当って、帰って平然としてお茶漬け食べたりして……その間、全部無言。何だかとても生き生きと演じていて、同じ役者同士とは思えないような讃辞を伝えに楽屋へ行っちゃった(笑)。それを素直に言えた自分、というのも今になればよかったです」

小日向さんが勘三郎と共演した『浅草パラダイス』は、平成十年二月、シリーズ二回目の公演。

「あのときの僕の役どころは、町の色男チンピラふう、という感じ。若い踊り子にチョッカイ出してるような役で、それが勘三郎さんの卯之助が目をかけてる女の子なんですわ。それであるとき町角でバッタリ出会って言い

合いになるシーン。立稽古で、勘三郎さんが江戸弁で本気でまくしたてるんですよ。それに圧倒されちゃって、本当はむしろ僕のほうがかましてるような立場なのに、気迫に負けちゃってひるんでたら、演出の久世光彦さんが声をかけたんです。ダメだよ小日向、目が泳いじゃってるよ、って（笑）。僕の蝶ネクタイ、ゴム仕掛けのをギューツと引っ張って、ビヨーンと放されるんですが、それも怖かったですね。忘れられません」

あのとときの吉田日出子の役は、新潟から女衞に伴われて上京してきた娘、そこにも小日向さんの楽土上がりの女たらしがからむ。

「一緒に逃げる役でしたね。勘三郎さんは自由劇場の芝居をよく観に来られてたし、デコさんとも仲がよかったから、デコさんの相手役小日向に対して、真っ正面からガンと来たらんですね。男同士、火花を散らすシーンで、完璧にやられました。しかし歌舞伎界を背負ってる勘三郎が、自由劇場の一俳優に対して

あれだけ真剣の抜き身状態でバシツと来てくれたことは、光栄なことだったと思いますよね」

勘三郎は小日向さんより一つ年下。何ごとにも対抗意識を燃やす勘三郎が、ちよつと嫉いたのかも、と思うのも今となってはほえましい。

小日向さんと吉田日出子の名舞台を、私が観た中で一つ挙げるとすれば『クスコ』（斎藤憐作、串田和美演出・美術）。初演は昭和五十七年、六本木自由劇場だが再演を重ね、私は平成五年七月、渋谷のコクーンで観た。

この芝居は平安時代の「藤原薬子くすこの変」に材を取り、桓武帝の三人の皇子、安殿、神野、伊予親王の皇位争いを描いたもの。

初演のとき、小日向さんが演じたのは阿呆を装って最後に勝利する第三皇子イヨノの役。このころに演技開眼したことは既にかいた。コクーンでは、小日向さんは第一皇子のア

テノ役。自ら見染めた若い娘ヨマの輿入れに付添ってきた母親のクスコに、たちまち心奪われて生涯を翻弄され、破滅に至る……。そのころまだ四十前だった小日向さんのしなやかな動きと、澄んだ声と、気弱で、恋には一途で、ときに狂気を帯びる眼の芝居が強く印象に残っている。

「まさに『クスコ』の初演のころから、デコさんには憧れ続けました。そのおかげで芝居に集中できたし、デコさんの生きざまを間近で見ながら、俳優とはどういうものかとか、芝居に対する厳しい考え方とかを徹底して教わった気がします」

小日向さんとしては生涯吉田日出子に憧れ続ける人生でよかったのだが、三十代半ばにして結婚を考えるようになった。

「自由劇場の後輩女優で、何回目かの『クスコ』ではヨマの役を演じてました。芝居ではこのヨマを袖にしてクスコのほうに執着するんですが、皮肉なことに現実とは逆になりまし

た。彼女は女優としての欲はあんまりないらしくて、役に選ばれないで裏方に回っても喜々としてやつてる姿を見て、もしかして奥さん向きなのかな、と思いましたから」

小日向さんは結婚して、本籍地を北海道から文京区の小日向神社の番地に移して届け出た。

「勘三郎さんのおうちのすぐ近くです。男の子が二人生まれて、デコさんもとときどき寄ってきて子供を可愛がってくれたりしました。次男坊は串田さんのうちの十二夜君と同じ年で、今中学二年です」

それにしてもデコさんは素敵だった、と小日向さんはしみじみと言う。

「可愛かったり怖かったりのくり返しでした。芝居のときは命がけみたいな迫力があってまわりを震え上がらせるみたいでしたけど、芝居が終った途端にガタツと子供みたいになつて、無邪気で（笑）。そのギャップが大きく

て、というか、ちよつと『天然』が入ってる
ようで（笑）、魅力的でした。昔から役者子
供と言いますが、子供の部分を持ってない
役者はつまらないかもしれませんね。

自由劇場時代、即興で子供を演じさせられ
たりしましたが、自分を解放するといふの
はそういうことだったのかもしれない。エグ
ササイズで、ボールが転がってきたら子供が
どう驚くかを一人ずつやらされるんですけど、
大の大人が今さらキャッツなんて恥ずかしい
（笑）。しかし羞恥心との闘いの中から何かが
見えてくる、と串田さんは言うわけです。

あるときは番号で歩かされたりする。一番
は一番で歩け、二番は二番、五番は五番で歩
け、とか無理難題を出されます。

また、ブリュッゲルの細密画を見せられて、
この絵の中の人物の二つのグループが道端で
出会ったとして何かやれ、とかね

そう言えば吉田日出子の『星の王子さま』
や『ピノキオ』など、子供の役が無類によか

った。

「ええ、それと、串田さんが『リア王』をや
ったときのデコさんの道化は素晴らしかった
ですよ。

道化というのは、ちよつと足りない阿呆小
僧だけど、リア王の心のたずなを握ってる。
子供のような純な心を持っているからそうなる
わけで、阿呆の役は深く面白く、誰でも
もやりたがるけど、難しい。

昔、子供のころにテレビで見てた藤山寛美
さんの阿呆役が大好きで、また渥美清さんが
『夢で会いましょう』の司会者の横でふざけ
てるのを見るのも大好きでした。あれも一種
の道化ですからね。

道化の役は、見る者を優しい気持ちにさせる
し、切ない気持ちにもさせる。阿呆な子って、
どこか悲しかったり、生きる力強さも持って
る素敵な存在ですよ。もしかしてこれが演
劇の真髄かもしれない、とまで思っちゃう。
子供のときに寛美さん、渥美さん、デコさん

をテレビで見て、そのことをぼんやりと感じてるんですからね。それがずっと今日に及んできているわけです。とにかく僕は学芸会で『リア王』の道化をやりましたからね（笑）。デコさんの無邪気さと純粹な感じは串田さんの世界には絶対不可欠のものなんです。デコさんも串田さんの演出以外の芝居には出たがりませんでしたしね」

近ごろ吉田さんの舞台をずっと観ていない。

「会えば必ず無邪気に『コ、ヒー』と声をかけてくれます。もともと童女のような人なので昔のまんま。永遠の日出子さんです」

小日向さんが読売演劇大賞最優秀男優賞に選ばれた『国民の映画』（三谷幸喜作・演出）のゲッペルス役。ナチスドイツの時代に、アメリカの『風と共に去りぬ』をしのぐような国民的映画の大作を製作しようとあれこれ画策するゲッペルスを、好色で単純な俗物に見

えながらどこか得体の知れない薄気味悪さを演じて圧倒的な存在感を示した。

それに何と言っても張り上げずに客席に届く、明快なのに自然な感じの台詞がいい。

「僕の声帯は僧侶をしていた親父から引き継いだものですかね。前にお話した、食糧難のために役所勤めに転職していた父が、故郷の新潟に初めて僕を連れて帰った時、なじみのお寺に遊びに行つて突然お経を読み始めたときに、びっくりしました。よく響く声でした。僕が小学校に上がる前のことです。僧侶の頃、読経の時、父がリードして引つ張つていく役だったと、あとになって父から聞きました。」

俳優は台詞を明瞭に届けなくちゃいけない。しかし一方で串田さんの考え方は、口跡よくとかじゃなく、たとえ台詞が届かなくつても魅力的なものだってあるんだ、ということ。言いにくいことは言いにくくしゃべればいいんで、朗々と水の流れるようにしゃべるのは

むしろ気持が悪いよ、と言われると、たしかにそれは古くさいな思ったりします。それを同時に演じ切るのは難しいけど、でもそれもやりとげてみたいな、と思ったりね」

それが勘三郎も前から認めていた「説明しない演技」、押しつけない台詞術、なのではないだろうか。

『国民の映画』のときも、錚々たるメンバーの中の主役で緊張しました。二幕の長台詞のところは初日二週間前に台本が来て、まだ自分の中に台詞がしみこんでなかったのでも自信がなくて、初日には舞台裏でとがった物を探しましたからね。出の直前にどこかに傷つけとけば、そのことで少し冷静になれるかな、というところまで追いこめました。爪立てたくらいじゃとてもダメで……二度とこんな苦しいことはないだろうと思うほど大変でした。

三谷さんはあの役を僕にあて書きしてくれたわけですが、あれで賞をいただけたのは、

あまりの台詞の多さに余裕がなくなり必死であがき落ち込む僕自身がゲッベルスと重なったのかなと思いますね（笑）。誰にも尊敬されてないことを薄々感づいているゲッベルスが、女にも相手にされずに自尊心を傷つけられているゲッベルスが、コヒナタ君に重なったのかな、という感じがします」

読売演劇大賞の審査員、渡辺保氏はこのゲッベルスを「一世一代の名演」とまで激賞している。

「三谷さんがやはりプレゼンターでスピーチして、最高の芝居と最高の映画とを比べたら、絶対に最高の芝居のほうが上。しかし面白くない芝居と面白くない映画とを比べたら、面白くない映画のほうがまだまし、と言ってましたけど、まさにそうですね。さすが、言い得て妙だと思いました。人を感動させる力はナマの舞台にある、ということです。お客さんを感動させたときの喜びというのは、すごいものがありますよ。舞台は稽古がほんとに

家族そろっての記念写真、すわっている三人の子供の中央が小日向さん。



しんどくて、身を削る思いだし、初日があいてももし台詞がまっ白になって立ちつくしたらどうしよう、という思いとの闘いです。『国民の映画』でもそんな感じが二回あって、血圧がグーッと上がるのがわかりました。それでも舞台をやめないのは、お客さんを感動させたときの喜びがよくわかるからです」

小日向さんはこの日、スピーチで中村屋兄弟の受賞を亡き父上がどんなに喜んでゐるか、と述べて、多くを語らなかつた。

「勘九郎君とは高校生のころ、串田演出の『ボヤージュ』という芝居で共演し、七之助君が小さいころにも串田さん主演の『スカパン』で共演しました。両方とももちろん勘九郎さんは観ています。それを言つてると長くなるし、会場の人たちは早く勘九郎君の挨拶を聞きたいだろう、と思つて」

挨拶の話から、團十郎葬儀の折に喪主をつとめた海老蔵のお礼の挨拶に話が及んだ。

「あれは聞かせましたね。父親の死に出遭つて肚をすえたのか、話に引きつけるものがある、色っぽくさえあつた。坊主頭で生意気な感じで歩いてたり、酔つて喧嘩したりしてきた日々からずうつと考え続けてきて、それが全部あの挨拶に集約されていたようで、よかつたと思う。」

串田さんもよく、二十四時間全部役者とし

て物ごとを考えなきゃいけないんだ、と言ふんですけれど、そんなことしてたら息が詰まるよと思つてました。しかし近ごろは発想は総て役者の発想じゃなくちゃ、と思うようになりましたね」

では、役者として今後考えるべきことは……。

「芝居というのは、二か月くらいは演出家と俳優と一つの座組として朝から晩までがつぶり一緒なわけですから、人間関係で非常に左右されますね。でもその前に作品があります。いくら役者が揃つても作品がつまらなければ身を削る甲斐がない。だからなるべく台本を自分で読んで、あとは直感ですね。いい作品に巡り合いたい、と二十四時間考えています」

(この項おわり)

つとめはげむことを、人々はほめたたえる。

放逸なることはつねに非難される。

（初期経典『ウダーナヴァルガ』4—24）

※岩波文庫『ブッダ 真理のことは・感興のことは』より

真剣、真摯であるということ

しばらく前になるが、夕刊をめくっていると大きな文字が目に入った。

「真剣にふざけてます」

そばには、おそらく誰かが知っている、あのものまね芸人のひょうきんな顔写真。一見、矛盾とも受け取れそうな見出しだが、記事を読み、「ふざけるのも真剣であればこそ、人情喜劇に笑いが生まれ、涙がある」との彼のコメントになるほどなあと大いに納得。声も、歌い方も、話し方も、表情も、ピミョーな体の動きに至るまで、歌手といわず俳優といわず、ありとあらゆる人物のそれに酷似した芸は、どれだけの人を笑い転げさせ、涙を誘ってきたことだろう。

いわゆる「芸」というより「芸術」と評すべきそのレベルは、いったい何が原動力になっているのだろうか。ものまねや芸が好き、ということはあるだろう。たゆまぬ努力——なみなみならぬ——も、もちろんだろう。しかし一番は、コメント中の「真剣である」ということ、これに帰結するに違いない。マイナスなイメージの「ふざける」ことも、万人を魅了する芸術に昇華させるもの、それが真剣さということなのだ。

先日、久しぶりに使おうとした腕時計が止まっていることに気付いた。いつも行く電気店で電池を交換してもらおうが動かない。

「電池じゃないね、壊れてるみたい」と店主。高校の入学祝いと、就職したばかりの姉にせがんで買ってもらったものだ。当時としてはそこその値だった。きつと、薄い給料袋（懐かしい！）をさらに薄くしてしまったことだろうと反省したのは、もうだいぶ後になってから。せめて姉の恩に報いるためにも、なんとか直したいと思い、メーカーに相談したが「三十年以上も前のモデルでは、部品がないため不能」と二歩もない。諦めきれずインターネットで時計修理店を調べ、あちらこちら電話する。しかし、やはり反応はよろしくない。部品がないものに手をつけ、もしもの時、取り返しがつかなくなっては、という不安があるのだろう。「責任」という点では、至極当然だ。

何軒目かで、「やってみます。直る可能性はゼロではありません。光明が一筋見えた。直してあげたいという意気が伝わってきた。穏やかな口調だが、「修理のプロを名乗ってるんだ、断れるか」という職人気質がうかがえる。もちろん、商売なのだからそんなの当たり前だろうとの見方もできるが、それ以上のものを感じたのは確かだった。お願いすることにした。この人でダメなら仕方ないか、と思えた。

三週間後、携帯電話が鳴った。「完了したので今日返送します。よかったです

ねえ、大切な時計が直つて」。息を吹き返し、一秒一秒、しっかりと時を刻んでいるその時計を左手首につけると、あの頃の姉の顔が浮かんだ。文字盤が滲んだ。芸でも、腕時計の修理でも、なんであれ、高度なことを成し遂げれば、誰もが感銘する。しかしそれは、単に上手いとか、腕がいいとか、それだけによることだろうか。

徒競走で一番遅れても、脇目もふらずゴールまで一生懸命に走る園児。

地区予選の一回戦、コールドゲームで敗戦、マウンドにひれ伏し地面を叩く高校球児。

いずれも、見る者に感銘を与え、励ましの言葉を発せしめ、涙腺を緩ませる。ここには決して、卓越した技能といえるものはないかもしれない。負けたから可愛そう、そんな安っぽい同情でもない。勝ったとか負けたとか、スキルの高低とか、そういったことは関与していない。純粹に真剣、真摯であることが人の心を掴み、揺さぶるといふ事実のみがある。人はそこにこそ救われ、癒され、だからこそ、日々の荒波を乗り越えていこうともするのだろう。

さて、そのすべてを輝かせる大事な源——自分はそうあることができるだろうか。いささか心もとない。

(小村 正孝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十一回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり
ワグナーとシヨーベンハウエル



仏教をきわめんと 極東の島国へ

「わが畏友の姉崎正治によれば、伯爵は御国の外交官には不人気な極東の島国への赴任をあえて望まれたが、その理由はショーペンハウエルに傾倒されていたからだ」とと渡辺海旭に訊かれて、ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵は「いかにも」とだけ答えると、目を閉じて黙考した。ようやく仏教談義ができそうだと内心期待をふくらませた海旭は、哲人伯爵の言葉を待ちきれずに問いを重ねた。

「ショーペンハウエルの哲学は仏教思想の影響を受けているといわれますが、そのショーペンハウエルを極めるためには仏教を研究しなくてはと、仏教国である日本を選ばれたのですか」

それは「問い」と言うよりは、姉崎から得た情報に基づき、海旭にとって「あらまほし

き推量」とでもいうべきものだった。哲人伯爵は、またしても「いかにも」とだけ言って、よく理解してくれているとばかり笑みを湛えてうなずいた。少々先を急ぎすぎかもしれないという懸念を海旭は頭から振り払ってさらに問いを継いだ。

「しかし、仏教を極めてみたいと思われたのなら、なぜまずは仏教の発祥の地であるインドをめざされなかったのですか」

「仏教がいまも生きているのは日本だ。インドはかつて仏教が生まれ、中国は仏教が通過した土地にすぎない」

哲人伯爵の盃はほとんど乾されていた。高貴な客人をいつまでも独り占めにしていることは許されない。海旭は核心に問いを放った。「そもそもショーペンハウエルと仏教に魅かれる理由は何でしょうか」

形而上的な解釈を期待していた海旭は、金色夜叉やオペラ談義の時と同じく意外な情緒的回答に少なからず面食らった。

「それは、この世が『涙の谷』であり『悲哀の井戸』だからだ」

哲人伯爵はそうぼつりと言うと言目した。

そのとき、伯爵の胸中には二人の女性をめぐる「事件」が去来していた。伯爵が人生で初めて「涙の谷」に直面したのは、名門のしがらみゆえに初恋の女性との結婚を許されずに彼女を自殺で失ったときだった。これまで誰にも言ったことはなかったが、地球の東の最果てを赴任先に選んだのは、故国から思い切り遠いところへ逃避したかったからだ。そしていま直面している「悲哀の井戸」は、愛妻ミツコの病だった。七人の子をなした後産後の肥立ちがわるく当時「死の病」といわれた結核を発症、南チロルへ転地療養してなんとか危篤状態を脱することができたが、まだまだ予断は許されなかった。

「私はかつて愛する女性を失い、いま再び最愛の妻を失うかもしれない悲しみに怯えている」と哲人伯爵は回想から脱すると深いため

息をついた。「これに打ち克つのに、シヨールペンハウエルの『生への意志の否定』がどれほど救いとなったことか。そしてシヨールペンハウエルがそのために援用した仏教の涅槃思想がどれほど救いとなったことか」

シヨールペンハウエルは

西洋の衣裳をつけた仏教

「生への意志の否定」とはシヨールペンハウエル哲学の根幹をなすもので、この世を「生への意志」（果てしない欲望）と挫折による苦悩ととらえ、これを否定することで苦界から解脱できるとするものだ。哲人伯爵が詳細を語らずとも海旭はその悲しみの深さを直感できた。いくら富や世俗の権力をもってしても苦界を避けることはできない、それに処するには「無の境地」を得るしかない。それは仏教の根本哲理であり、シヨールペンハウエル哲学が仏教の援用とされるゆえんである。

「シヨールペンハウエルと仏教」が日本の知識

人たちに大いなる話題と関心を呼び起こしたのは、たしか海旭が浄土宗学本校の学僧として勉学に励んでいるころだった。「ショーペンハウエルの哲学は仏教が西洋の衣裳をつけてあらわれたもの」として大いにもてはやされたことを海旭もよく覚えていた。

片や、哲人伯爵は、来日して二年、ミツコと結婚して間もない頃で、ショーペンハウエルが日本で受容される過程を興味をもって目撃する機会に恵まれた。もっとも印象的だったのは、当代随一の哲学者であった大西操山博士が須磨のキリスト教夏期学校で行った、ずばり「ショーペンハウエル」と題する講演であった。大西博士いわく――

「ショーペンハウエルの哲学は仏教的厭世思想が、その服装をかえて現れたるの趣あるなり。その哲学を研究せば、われらに親密なる厭世思想が、如何なる形をとって現われたるを知るの一助となし得べし。ことに近來ショーペンハウエルの名はわが国において知らる

るに到れば、その哲学の梗概を知るは決して無用のことにあらざるべし」

哲人伯爵がショーペンハウエルの哲学から仏教研究心を抱いて来日したのとは真逆に、日本の哲学者と仏教学者たちはショーペンハウエルが仏教思想を援用したことからショーペンハウエルの哲学に興味をもったのだった。この「相互運動」は、浮世絵がフランスの印象派に影響を与えたことで日本でモネやルノワールが評価され、また琳派がアールヌーボーに影響を与えたことで日本で欧州発の新芸術運動が受容される関係にも似ていた。

しかし、ショーペンハウエルの仏教哲学の援用については、いささか浅薄な理解にもとづく牽強附会であることがその後日本の哲学界、そして仏教界でも議論になり、それについては海旭も聞き及んでいた。ちなみにショーペンハウエルは苦界からの解脱として「無の境地」を説くが、「無」を「有」の二項対立概念とする西欧的理解から抜け切れていな

いという批判がその典型である。

海旭の疑念を見抜いたかのように哲人伯爵は言った。

「たしかに、シヨーペンハウエルの仏教理解は底が浅いかもしれぬ、それについては日本にいたころも仏教界の高僧たちから指摘をされた。しかし私にとっては、それは大した問題ではない。シヨーペンハウエルも仏教も、ともに私がこの世の『涙の谷』を乗り越え、『悲哀の井戸』を汲みつくすための大いなる救いになったということだ」

**日本に学んだもの、
失望したもの**

海旭は興味を魅かれて質した。「日本の仏教がそんなにも救いになったのですか」

「いかにも」と哲人伯爵は大きく頷いた。

「日本にやってきただけのことはあった」

哲人伯爵が来日当時の日本仏教界は廃仏毀釈によって衰微をきわめており、むしろその

再興のために海外に学ぼうとする気運にあったので、伯爵の評価は意外だった。しかし伯爵の説明は海旭が期待していたものとは違っていた。

「私の救いとなったのは、残念ながら日本の知識人たちの仏教的知見というよりは、庶民の間に根付いている仏教観だ。その最たるものがミツコの愛情だ」。哲人伯爵は一瞬、口元をほころばせたが、真顔にもどると言い直した。「いや、慈悲の心と言うべきだろう。これぞ日本に生きている仏教の証だ。それをもっともよく体現していたのがわがミツ子だ。おかげで妻にめとり故国に帰ってからは、軍服も狩りもきっぱりやめにした」

論旨の飛躍に海旭はついていけずに眉根を寄せた。伯爵はそれを察してか補足を加えた。

「私は、この世は所詮『涙の谷』だと嘆くだけの厭世家だと思われているようだが、それは大いなる誤解だ。シヨーペンハウエルも好きだが、トルストイも大好きだ。厭世主義と

博愛主義は私の中で矛盾することなくしっかりと両立している。その点からいうと、仏教こそ厭世主義と博愛主義を共存させており、素晴らしい限りだ」

海旭はますます混乱し寄せた眉根を解くことができなかった。「仏教が軍服と狩猟にどう……」

「すまん、すまん、いらぬ困惑をさせて」

そう哲人伯爵は言うのと、さらに説明を加えた。

すなわち、当時貴族たちの間で「これぞ文明の華」と賞賛された決闘を「蛮行」だとして廃止を唱え、子供たちにくくらせがまれても軍服は着せず、おもちゃの兵隊で遊ぶことさえ禁じた。これまた貴族の嗜みとされた狩猟も、人間以外にも博愛は及ぶべきだとの信念から広大な領内に罾を仕掛けることを禁じ、そのためロンスベルグ城苑は、狐から野鼠まであらゆる動物たちの楽園となっていた。さらに、たまに町場へ出かけると病院を

たずねては患者たちに慰めの言葉をかけ、多額の寄付をしているという。

これを聞いて海旭は感じ入った。哲人伯爵は、世の中を斜に見て悦に入っている西欧のインテリにありがちな俗流厭世家（ベシミスト）ではない。厭世家にして博愛主義者、いや仏教の理解者であることからすると「厭世家にして報恩主義者」と言うのがふさわしい。海旭には哲人伯爵がますます魅力的に見えてきた。

と、哲人伯爵は何やら往時を思い出したらしく、にわかに口元をゆがめると言った。「日本には仏教が普通の人々の間でしっかりと生きていた。それに引き換え仏教界は相争うばかりで、消耗・消滅の危機にあった。そこで、私は……」

海旭は身を乗り出すと「そこでどうされたのですか」と説明を促した。

哲人伯爵は、廃仏毀釈で四分五裂する日本の既成仏教の状況を悲しみ、この和合を企図

して公使館に有力仏教各派の指導者を呼んでは懇談を重ねたこと、そしてその末席には当時東京帝大の学生だった姉崎正治も加わっていたことをつぶさに話してくれた。わずか四年の在任だったが、それが功を奏してか、やがて仏教各派の「和合」になる。さらには明治三九年、神仏基の有力者たちがそれまでの対立と競合を超えて一堂に会する第一回宗教家懇談会が開かれるいっぽう、学問の世界では比較宗教学会が創設されるが、これに大きな役割を演じたのは、伯爵の薫陶をうけた姉崎正治であった。

伯爵が試みた「宗派の和合」は、海旭がドイツ留学前に高島米峰らと語らってはじめて仏教清教徒同志会とも相通じる考えであり、また遠くは海旭を仏門へ導いてくれた福田行誠師から諭された「兼学」の精神によって既成仏教の再興を画せという教えとも重なるものであった。哲人伯爵への海旭の評価は畏怖に近いものへと高まっていくのだった。

哲人伯爵による 未完の大著

ワイン片手に歓談にふけることすでに二時間に及んでいた。心残りではあるが、そろそろ幕を引かなければならない。海旭は最後の質問を發した。

「伯爵、これからどんなことを……」

哲人伯爵は盃の底にわずかに残った美酒をゆっくりと飲み干すと、大いなる夢を語りはじめた。

「ショーペンハウエルと仏教を導きの糸として、これまで何とかわが身を処してきたが、そろそろ自らの考えを本格的な書物にまとめてみたい。タイトルは決まっている。『意志の否定』だ。ショーペンハウエルの哲学を機軸にすえ、仏教をはじめとするあらゆる宗教の教義の中にある通世、献身、自克の実例をあつめ、宗教の理想は現世ではなくて彼岸にあることを明らかにしようと思っている」

海旭はその氣宇壮大に圧倒された。まさに哲人伯爵畢竟の著作とでも言うべきものだった。伯爵の居城の書齋には、万巻の書物とともにソクラテス、プラトン、アリストテレス、マルクス・アウレリウス、カント、シヨープンハウエルらの胸像が林立。日本から帰任してからにはここに金色の仏像が加わり、壁にはコーランの経文が彫りこんであるなかで、その下準備は着々と進められていた。

また「自己」否定こそ真の宗教の核心である」とのテーマのもと、キリスト教はもとより、仏教、ヒンズー、回教など世界宗教の聖者たちの資料を広く世界の知人たちに求め、そこから「副産物」も生じつつあった。たとえば居城の書齋にインド人回教徒を招いたおり、伯爵はマホメットの精神を西洋人に理解できるように「金言集」を提案、それは後にマハトマ・ガンジーの序文つきで出版されることになる。

仏教関係の協力者は日本の姉崎正治であっ

た。海旭は姉崎からヨーロッパの知人に大蔵経を求められていると聞いたことがあったが、それは哲人伯爵によるものだった。

哲人伯爵は、偉大なる「厭世家にして報恩主義者」に加えて、偉大なる著述家の可能性も秘めていると海旭は驚嘆をもって思った。

そこへお付きの従者がやってきて「伯爵、そろそろ馬車のほうへ」と促した。どうやら別離の時がやってきたようだ。海旭は威儀をただして深々と一礼すると、別れの辞を告げた。

「伯爵、ご高説を承り感謝に堪えません。私を仏門に導いてくれた恩師から『兼学』、すなわち、一宗門、いや仏教を超えて宗教の根本哲理を極めよと教えられ、この教えに従って、私はいまドイツで学んでおります。本日万国宗教歴史大会で研究発表したのもその一環であります。浅学非才の私にとって大いなる励みともなりますので、ぜひとも御著作の一日も早い完成を心待ちにしております」

哲人伯爵は大きく深くうなずくと、海旭と握手を交わし、踵を返した。

父から子へ引き継がれた

「汎」の思想

海旭は予想だにしなかったが、これが二人の今生の別離となった。

スイスはバーゼルでの万国宗教歴史大会での出会いからわずか二年たらず、新緑もえ薫風かおるボヘミアの古城で、哲人伯爵は四十七歳の若さで、七人の子供と愛妻を残して不歸の人となった。日課の大著作にとりかかる前に庭を散策しようとベッドから起き上がったとたん心臓に発作をおこして急逝。美酒を傾けながら海旭に大いに語り海旭も大いに期待した著作は未完となった。

姉崎によると「大蔵経を買うのでそれを納める特別な書架を依頼した。ついては日本からの運送費用はいかほどか」との手紙が届いたが、その依頼は果たされることはなかった。

埋葬を待たずに、四十冊を超える大部の日記が生前命じられたとおり執事の手で焼却された。この中には未完の大著の手がかりが記されていたはずだが、伯爵は自らの思想の痕跡を茶毘に付し、それは野辺の煙とともに消え、ついに著作の中身を窺い知ることはできないままとなった。

かくして大著作家となる可能性は絶たれたが、伯爵は大いなる遺産を残した。

本格オペラの初演と宗教融和を日本への置き土産としたことは、バーゼルでの出会いで海旭も知り深い感慨をおぼえたが、伯爵はもっと偉大な未来への贈り物を、日本で生まれた次男の栄次郎ことリヒャルト・クーデンホーフ・カレルギーに託したのである。リヒャルトは第一次大戦で対立と分裂を深める欧州にあつて、「汎ヨーロッパ主義」を提唱、それはやがてヨーロッパをまとめてついにEUを生む。国際平和に向けたこの歴史の壮挙は、父である哲人伯爵が日本で試みて実現させた

「汎仏教」、そして幻の大著作で果たそうとした「汎宗教」にこめられた「汎の思想」が、息子に託されて政治の世界で花開いたものといつてよいのではなからうか。

（この項完）

（木村毅『クーデンホーフ光子伝』鹿島出版会を参考にしました）

*

最後に「閑話休題」を付け加えることをお許しいただきたい。

さる一月三十日、戦後日本の政財界のプレインとして活躍した加藤寛氏が逝去された。享年八十六。氏は渡辺海旭師が校長をつとめた芝中学の出身で、私の大先輩にあたる。二年前に本連載を元に『紫雲の人 渡辺海旭』を上梓し贈呈をしたところ、よくぞ海旭師の偉業を掘り起こしてくれたと過分の評価をいただき、自らの「遺言」をまとめてほしいと依頼された。そこで加藤氏と教え子の皆さんと何度も研究会をかさねた。その渦中で、三

月十一日の東日本大震災が発生。加藤寛氏は「原発即時ゼロ」を中心に提言をまとめたいと決断された。

政権のご意見番として「国鉄分割民営化」「郵政民営化」「小泉構造改革」を指南してきたあの加藤寛氏が、「脱原発」どころか「原発即時ゼロ」を唱えることに、正直、私も教え子たちも驚いた。まさに「未来への遺言」である。

功名をとげた人ほど晩節を汚すが、加藤氏は晩節を見事に飾られた。それは海旭師にも通じるものだ。加藤氏の遺作『日本再生最終勧告―原発即時ゼロで未来を拓く』は未曾有の震災から二年の三月十一日直後に書店店頭に並んだ。

ここに加藤寛氏のために小文を捧げ、心よりご冥福をお祈りする。

合掌

第五十一回

江戸を歩く



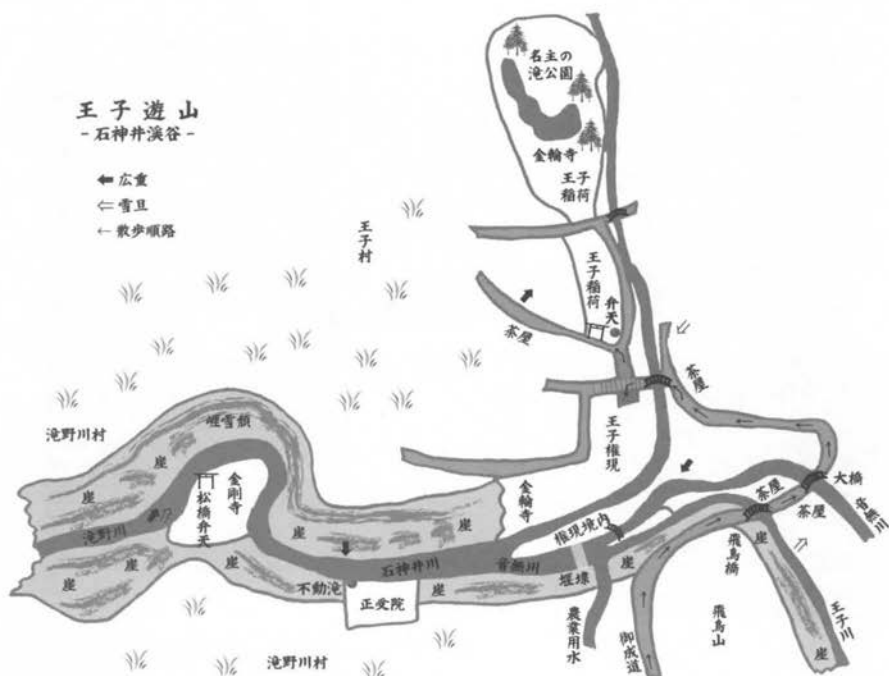
王子権現

森清鑑

大江戸ウォーカー

王子権現

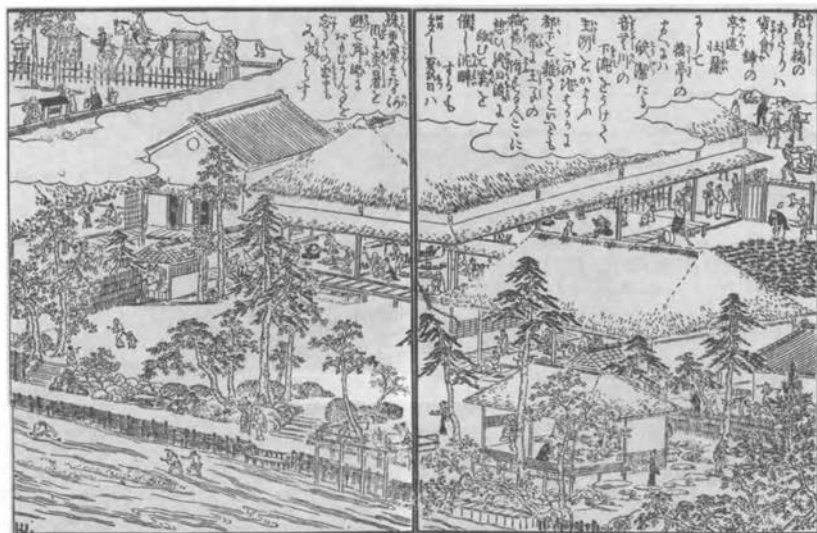
御成道は飛鳥山の西側を通り、北側をなめて続く。江戸では通常駒込からここまでを御成道と呼んだ。飛鳥山北側の坂を登ると左側は崖。眼下に石神井川が蛇行し、目を見張る景色である。対岸には王子権現社が広がっている。川沿いに、権現様を管理する別当、金輪寺の社が見える。川の西（上流）に目をやると、左右に切り立つ崖の幅も広がり、溪谷が広がっている。権現様に行くには通常、この坂を下り、飛鳥橋を渡って、再び坂道を左に回り込む。つまり迂回する。飛鳥橋の中央に立って左を見ると石神井川の崖がそそり立ち、振り返ると飛鳥山の東側の崖がずっと南に続いている。橋から見上げる眺めも優美である。石神井川の左右に広がるこの崖のことを、江戸期、**帷雪顔**と称した。現実感たっぷりの表現である。そこには当今では信じられないほど、美しくも荘厳な溪谷美が存在して



◆散歩図 王子遊山

いたのである。このような溪谷美ができた理由は、上野の山から北に続いてきた上野台地が飛鳥台地とぎれているからである。石神井川はその北の縁を流れている。

ともあれ、今日は風光明媚なこの辺りを散歩しよう。まずは王子権現を参詣する。飛鳥橋を渡ると道の左右にすでに茶屋が並んでいる。店で一杯やりながら欄干ごしに対岸の飛鳥山の崖を見上げ、桜をめぐる人たちも当然居るだろう。茶屋の間を縫って進むと、大橋。渡ると道は左に曲がり登って行く。するとまた茶屋が並び、小川を越え左に曲ると、すぐ左手に王子権現の惣門が見えてくる。惣門を潜ると広い空間があり、舞台、鐘楼、荒神、明神社等が点在し、奥に本殿の蔵王堂が控えている。背後に、高い石垣が横一直線に立ち、中央に二本の石段。上るとそれぞれ大神宮と東照大権現の社がある。境内から、飛鳥山、石神井川の崖を眺望することもできる。これまた絶景である。



◆江戸名所図会 飛鳥橋茶屋の風景。前の川は王子川

鎌倉時代、この辺り一帯は豊島氏が治めていた。この時代、「熊野詣」は最も活発な時間で、全国から熊野本宮や新宮を詣でた。一三二二年、領主、豊島氏は、熊野古道沿いにある、熊野新宮の浜王子たる若一王子を勧請し、ここに王子権現として祭ったのである。以来、人々はこの辺り一帯を王子と称するようになった。八代吉宗は、熊野も治める紀伊徳川の領主。將軍となってこのことを知り、王子権現の拡充、飛鳥山も含めた辺り一帯の溪谷美をさらに盛り上げるため桜や紅葉を植え、参詣を兼ねた一大観光地とした。江戸っ子は二里のハイキングコースを楽しみ、「王子詣」はたいそう賑わったのである。

王子稲荷

広重も雪旦もこの辺りの情景を沢山描いている。王子権現の惣門を出ると目の前の坂道の上が王子稲荷社である。北に縦長に抜がっている。周囲の眼下に広がる広大な畑は王子



◆江戸名所図会 王子権現社境内 絵の右下惣門、右上飛鳥山の崖と石神井川が見える。

村。広重は権現社の惣門前の道を行って王子村の畑から王子稲荷の、小山の森を幻想的に描いている。冬の夜、畑に立つ、一本の大きな榎木のもとに沢山の狐が集まっている。口にくわえた骨から発した狐火がめらめらとちらついている。狐は次々と榎木を飛び越え、高く飛んだものから命婦装束（宮廷女官の装束）に着替え、王子稲荷へと向かうのである。夜のしじまにその姿が見える。その先の盛り上がった黒い森が王子稲荷で上には星が降っている。狐火とは燐光なのか。江戸時代、多くの人がこれを見るために大晦日にここに集まった。見えたり、消えたり、恐ろしい思いをしながら見入ったという。

そこで話題に上るのが落語「王子の狐」である。神田の住人、源さんが王子稲荷に参詣の途中、原っぱに来かかると、大きな狐が昼寝している。狐は人を化かすというが、ひとつ俺がだましてやろう。「姉さん、こんなところで寝ていたら風邪引くよ」。びよこんと

起きた狐は、慌てて美人の姉さんに化ける。源さん言葉巧みに誘って二人して王子稲荷にお参りし、料理屋に寄る。さあ、食えや飲めや歌えや、ですっかり酔っ払った狐は寝入ってしまう。源さんこっそり抜け出し、勘定は二階の人が払うからとずらかる。頃合いを見て店の女が勘定取りに上がると、化けの皮がはがれた大狐がいびきをかいて寝ている。転

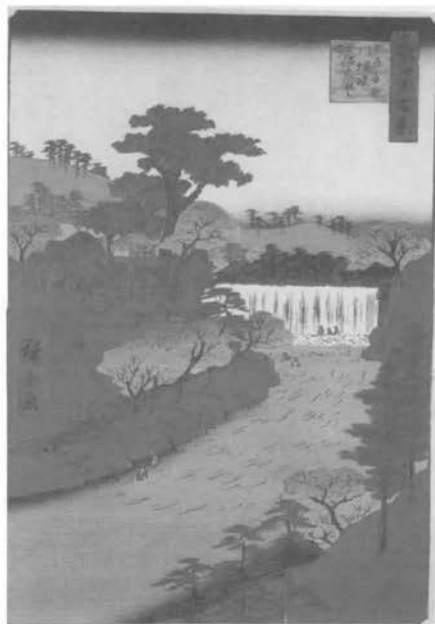


◆広重 狐火 狐の集合 左に榎木、右中の陰影が稲荷。装束をまとった狐が稲荷へ向かうの図

げ落ちるように階段を下りると大声。店の者が大勢上がり、狐を袋だたき。源さん家に帰ると、大家さんに得意げに話す。と、そりゃ、いけないことをしたと大家さん。「狐はお稲荷さんの使い。それをお前なんてことしてくれたんだ」。翌日、源さん、まんじゅう持参で謝りに行った。すると原っぱに子狐が遊んでいる。親はどうしたと聞くと、けがをしてうなつて寝ているとのこと。源さん、昨日の詫びを入れ、これを母狐に渡してくれ。子狐は事の次第を話し、母さん、こんなにまんじゅうをもらったよ。すると母狐。「およしよ、だまされるんじゃないよ。馬の糞かもしれない」

王子稲荷社の惣門は権現社を出て、左に回り込む本道の右側にある。惣門前、それから先の右側にも茶屋が密集している。「この辺、茶屋多し」。惣門を潜ると右手に弁天様があり、池がある。鳥居を潜って広場の先には数十段の石段が二列あり、左に垢離場。細長い

滝に打たれて水垢離する場である。石段を登るとまず目につくのが樹齡何百年のご神木。その左に壮麗な本社がある。歴代將軍の寄進もしばしばで、とりわけ十一代家斎によって再建された極彩色の社殿は当時の江戸文化の粹をあつめたものであった（戦災で焼失）。本社の背後に高い石垣があり、その左を巻くように急な石段。すると朱色の鳥居が立ち並び、稲荷が祭ってあった。背後には小高い山



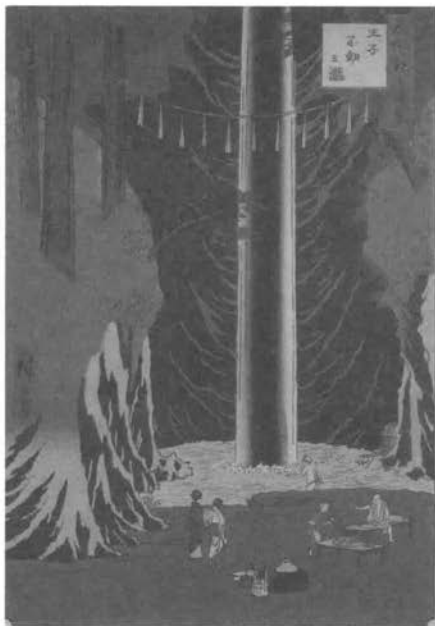
◆広重 堰堤の図。絵の左、飛鳥山、右王子権現

が折り重なっている。この辺りに狐が沢山住んでいた穴がいくつもあり、今でも「お穴さま」とうやまれている。王子稲荷は古くは「岸稲荷」といわれた田の神。王子権現に続いて王子稲荷となり、源頼義以来の関東稲荷総司としての格式を保ってきた。つまり、関東にどのくらいあるかわからない数の、稲荷の総帥なのである。家康は別当金輪寺を奉っていた関係もあって、王子権現ともども寄進を尽くしている。以降、歴代の将軍が参詣するとともに力を入れてきた。当時は稲荷信仰が活発で江戸っ子は飛鳥山の遊山を兼ねてお参りし、辺りの溪谷美を楽しんだのである。

名主の滝公園

王子稲荷の北に隣接して名主の滝公園がある（現存）。これは嘉永年間に王子村の名主畑野孫八が自邸に拵えた自然豊かな庭園。遊山に來た江戸っ子に自由に開放した。小高い山のあちこちから湧き出た水が滝となって流

れ込み、細長く蛇行する浅瀬となり、池を造っている。辺りは深閑とした豊かな森で湧水は木々の間を抜け、見事な自然美を現出。溪流の周囲は自然石が置かれ、優美な石橋が架かっている。滝は四カ所。一番右側の男滝は落差八メートルにも及ぶ。現代でも都会にはめずらしい自然美を醸した名園である。

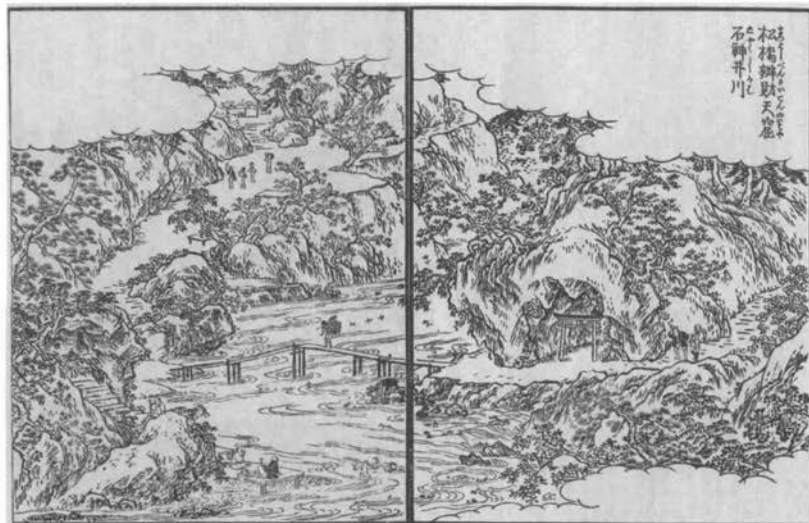


◆広重 王子不動の滝

石神井川溪谷美

再び石神井川に戻ろう。川は三つに分かれ、間に王子権現の境内（敷地）が挟まっている。上流に向かって左手が飛鳥山で右手は王子権現の別当金輪寺。石神井川の前方に水をせき止める堰（石堰）が見える。この堰は灌漑用に設けられたもの。広重はここを描いた。堰をこぼれ落ちる水はしぶきを上げ、ところの人々はこれを大滝と呼んでいた。川魚を捕る人、滝に打たれて水垢離する人の姿が見える。堰の先には金輪寺の社が見えるがこれは川が左に迂回し、右側に金輪寺が巻いているためである。堰の先で川は二つに分かれる。この分岐点にある金輪寺から堰までの川幅は広く、ゆったりと流れているので人々は音無川と名付けた。そして時を経るにつれ、ここから先の下流も音無川と呼ぶようになった。

石神井川の上流に動いてみよう。川の分岐点、堰堤の方を振り返ると、右手は崖がそり

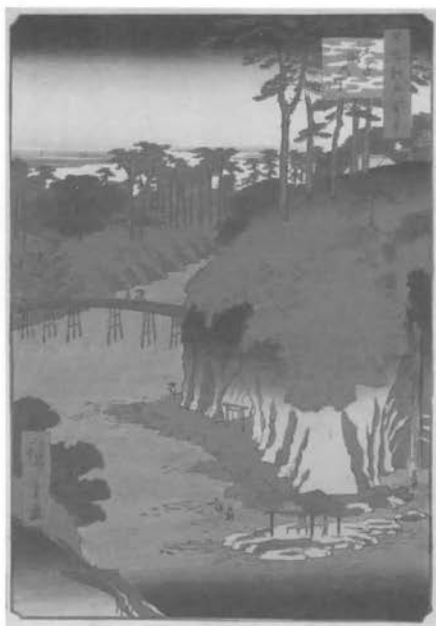


◆江戸名所図会 松橋井天洞窟。下流に向かう石神井川の流れと右鳥居、井天洞窟。遊山の人々の姿が見える。

上がっており、太い滝が滔々と流れ落ちてい
る。滝の麓に不動明王が祀っており、人々は
不動の滝と呼ぶ。崖の上は滝不動、正受院で
ある。広重はこの堂々たる滝を一本の柱のよ
うに描いている。滝壺の前には縁台が置かれ、
涼をとり、一杯やっている人の姿が見える。
滝壺で滝浴みしている人も。真夏でも寒さを
感じる深山幽谷の感。

そのあと、川は突き出た島を巻くように上
流に向かう。周囲は険しい岨雪類。再び下流
を振り返ると、右川沿いに鳥居と洞が見える。
洞窟内に吉祥天女が祀られており、これを岩
屋弁天とか松橋弁天と呼んだ。その突き出た
島の上にあるのが松橋院金剛寺である。この
美しい景観に吉宗は紅葉を沢山植えさせた。
通称紅葉寺。王子権現や稲荷を参詣する江戸
の人々はここまで足を伸ばし、有数の溪谷美
を楽しむのである。現在でも紅葉の季節に
は紅葉を楽しむに大勢の人々が訪れる。

その昔、石橋山の戦いに敗れた頼朝は房総



◆広重 王子滝の川 右崖の鳥居が松橋弁天

に逃れ、帰途ここに立ち寄り、すばらしい景
観にうたれ、しばらく逗留した。下を流れる
川は激しく、「まるで滝のようだ」といった
とか。この故事からところの人々はこの辺り
を「滝の川」と呼ぶようになった。江戸期、
松橋弁天の周囲は滝野川村。特に川の南側一
帯に広がる地帯には滝野川村としての畑が拡
がっている。

(つづく)

講師

ひろさちや 「お浄土のはなし」



ひろさちや

1936年大阪生まれ。東京大学文学部哲学科卒業、同大学院博士課程終了。気象大学校教授を経て、大正大学客員教授。宗教思想家。仏教、インド思想の研究、執筆等に幅広く活躍。一般の人々に仏教を平易な言葉で身近なものとして伝えている。

主な著書に『仏教の歴史』全10巻『釈迦』『仏陀』『因果にこだわるな』（春秋社）『どの宗教が役に立つか』『仏教とキリスト教』『仏教と神道』『宗教練習問題』『お念仏とは何か』（新潮社）『わがふるさと浄土』（宝蔵館）『わたしの南無阿弥陀仏』（佼成出版社）など500冊を超える。

会場 東京芝大 本山増上寺 慈雲閣1Fホール

□東京都港区芝公園4-7-35

□地下鉄都営三田線芝公園または御成門下車徒歩3分

地下鉄都営浅草線大門下車徒歩5分

JR浜松町下車徒歩10分

6月25日(火)

午後1:30開場 午後2:00開演(3:30終了予定)

会費 1,000円

(当会会員無料)

お問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

浄土誌上句会

● 節

〔特選〕 母の節どこかはずれて花菜風

増田信子

花菜風とあるから、摘み草を思い浮かべてもよいだろうし、散策と取ってもよからう。母の口から歌がもれてきた。その節がどこかはずれているのである。うらうらと晴れた、春の気分がよく出ている句だと思う。

〔佳作〕 山茶花のかなた昭和の演歌節

早乙女喜栄子

関節の素直に曲がる春隣

工藤 掉

節くれの手に葉塗る冬座敷

山口信子

● 分

〔特選〕 分きざみみの面接窓に冬の雨

石原 新

入社か何かの試験官をしているのだ。沢山の応募者のために、一人々々分きざみに進めていかねばならぬ。あと何人残っているのだ

ろう。ふと窓を見ると雨が降っている。いかにも寒々としている。

〈佳作〉

分校は跡形もなし春陽影

佐藤 雅子

梅林の道が分かれてまた会いぬ

斉田 仁

芽吹く草売れ残りたる分譲地

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

路地裏の甘味処を恵方とす

篠原 肇

正月を前にして、来年の恵方はと恵方とい
たら、ふとその方角にある甘味処を思い出し
たのだ。そうだ、久しぶりにそこへ行ってみ
よう。こうなるとお参りはそのついでになっ
てしまふ。それでよいのだ。

〈佳作〉

石垣が掌よりも温し一里塚

山内桃児

嶺白し吊し大根銚色に

井村善也

野水仙灯台も入れ絵に収む

東 保



能化自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■節

物憂げなおなこの節目春隣
節分にわが孫鬼になりにけり
節操は唯事ならず出初式
如月という音がして股間節
春の空デカンショ節を高吟す
踊るもの御飯の上の鯉節
その節はどうもと返す梅の道
節穴を見つめ返せば山笑う
一節で終る一節手鞠歌

當麻アサ子
飯島英徳
佐藤雅子
内藤隼人
大野義孝
山形 彰
安西幸恵
遠山幸弘
歌野俊彦

■分

春浅き分水嶺に雲一朵
分身に経を教えし我が身かな
地酒酌む分別盛りの雪催い
その梅の二時一分の白さかな
網焼を半分するは難しき
顔のみは分別臭き孕み猫
家の前分相應の斑雪
半分こして焼詣のほっかほか
分際をわきまえて鳴く寒鴉

■自由題

春めきて旅の誘いの便りあり
初風や苦屋の屋根に湯気が立ち
春障子漏れくる朝日に和みをり
寒椿葉のふくよかを窓に活け
笑うたび吹き出していて柳の芽
釣人の背中の丸く冬終る
噴水に立春の陽の当たりけり
縁側でのびのびしたるヒヤシンス
臘夜というべきはこれ能舞台
納骨のあとの珈琲水草生う
音楽の原点として蛙鳴く
昼餉かな目につぶりと春の海

當麻アサ子
飯島英徳
早乙女喜栄子
西原規夫
工藤 掉
山内桃児
内藤隼人
小林苑を
伊藤征夫

締切・二〇一三年五月二十日
発表・『浄土』二〇一三年七・八月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ

かまちのぶらう



右を見て左見る間の五月間

岱潤

私は仏教テレフォン相談の相談員を務めて二十七年、八年になる。私の入っている団体は、「仏教情報センター」という。

昨年一般社団法人となった組織で、現在は八宗派一三〇名ほどの相談員が、月曜から金曜の毎日十時から四時まで三名ずつ事務所に詰め、三台の電話機にかかってくる電話に対応している。この団体は設立して三十周年を迎える。受けた電話の総数は、二十万回を数えようとしている。その内容は統計表を見ると明らかに変化がある。最初の頃はお布施の金額や仏事マナー等の質問が多かったが、平成

十五年頃から明らかに人生相談、生活の悩みの相談が増えている。一つの電話にかかる時間も増え続け、結局二台から三台に電話機を増やさざるを得なくなった理由がある。平成十五年からの十年、この国では自死者が三万人を超える年が続き、うつ病の人は六百五十万人、引きこもり者は百万人を超えているという。

平和が続く、餓死者もほとんどでない世界たぐいまれなるこの国で、心の病の人がこれほど多いのはなぜだろうか。一日五時間、電話を受け続けていると、私自身がぐったり疲れてしまう。だから三十周年の記念大会は仏教の力を信じ、明るい仏教を提示してゆきたいと思った。

「仏下駄主義」という言葉がある。ひろさちや氏が言っている言葉だ。「全てを仏様に任せて生きる」。私たちの生き方はこれしかないと思う。

このことを伝えてゆきたい。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐田哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年四月二十日

発行 平成二十五年五月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・六九四七

振替 〇〇一八・〇八・八二八七

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪



石川県

あらや滔々庵

端午の節句。我が子の成長にあたって、己に厳しく人に優しくあって欲しいと、兜を飾ってきた五月です。

風薫るなか、友人から名湯・山代温泉の「あらや滔々庵」の名物『源泉たまご』が届きました。

「あらや滔々庵」は加賀・前田家歴代藩主の入湯の宿で、北大路魯山人や須田青華とも交流があり、現在は18代目。おもしろい老舗旅館です。この名宿の朝食に出される『源泉たまご』は、敷地内の山代温泉随一の湯量を誇る良質な源泉に、数時間浸されてできあがります。

黄身の色が濃厚でトロ〜りとしつつも、しっかりした味、白身は乳白色でやわらかく口に運ぶとほんのりと硫黄の香がする絶品。常温で10日間もちますので、お取り寄せができることも嬉しい。

そう言っても1日の生産に限りがあるので、時間に余裕をもって頼まれるとよいかもしれません。



『源泉たまご』
10個入り1050円
(送料別)

石川県加賀市山代温泉湯の曲輪
TEL 0761-77-0010
FAX 0761-77-0008
営業 9:00~17:00
休日 無休

新

刊

案

内

関東十八檀林 ガイドブック

いまよみがえる関東巡礼の旅



江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した摂門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。

《十八檀林》

東京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千葉	大巖寺	東漸寺		群馬	善導寺	大光院
茨城	大念寺	常福寺	弘経寺(瓜連)	弘経寺(結城)		
埼玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺		神奈川	光明寺

発行：関東十八檀林霊場会
A5版／カラー96頁
：800円（税込）

※本誌のお求めは、
法然上人讃仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。